弥山はみんなの財産―どうなってる、誰が守る、どう守る？．ワークショップ「シカと森と人の折り合いを考える集い」（ほほえみぽーと天川，奈良県吉野郡．2010 年 11 月 27 日）資料

講演タイトル：弥山の森はみんなの財産：どうなってる，誰が守る，どう守る？

演者：辻野亮（総合地球環境学研究所・プロジェクト上級研究員）

プロフィール：1976 年大阪生まれ．屋久島で樹木と地形の関係，長野県秋山地域で森林利用と生き物の多様性の関係，研究所では人と哺乳類のかかわりの歴史を研究してきた．中学のときにはじめて山上ケ岳に来て以来，高校でも，大学でも，大学を卒業しても大峯を訪れている．

要旨：弥山の森には人々をひきつける何かがあります．弥山の森の魅力とはいったいなんでしょうか？大峯山系や弥山，天川村には豊かな自然と文化がありますから，もしかしたらその辺りが魅力の元になっているのかもしれません．

弥山の自然には 3 つの特徴があります．ひとつ目は比較的狭い範囲の中にさまざまな森の姿があることです．狭い面積にいろいろな森林があるとその分だけいろいろな植物が生育するし，それに頼って生きている動物たちも多種多様になります．二つ目は原生的な森林があることです．実は日本列島の森林のうち，原生林は少なく，国土のおよそ 20 パーセント程度にしか過ぎず，弥山周辺の原生林は貴重です．三つ目は「遺存的」な環境が残されていることです．今から 1 万数千年前は氷期にあたり，いまでは中部山岳地帯の亜高山で見られるような針葉樹の森が，いまよりもずっと寒かったせいで標高の低い場所でも普通に見られました．それから暖かくなった現在では，近畿圏では弥山周辺にだけ亜高山針葉樹林が残されました．この遺存的な環境のおかげで，オオヤマレンゲやキリクチ（イワナ），シラビソの「縞枯れ」現象が見られます（左図）．縞枯れ現象とは，風などの影響で樹木が列を成して枯れ，明るくなった地面ではあらたな芽生えが生長してゆくという現象です（右図）．枯れた樹木の列がいくつも並んだ様子が縞のように見えることから縞枯れと呼ばれます．

→シラビソが生長してやがて枯れる→

自然だけを見てもこんなに魅力的な弥山でいま，何が起こっているか想像できますか？実は 1990 年代からさまざまな異変が見られるようになってきました．オオヤマレンゲが徐々に姿を消すようになりました．増えてきたニホンジカがオオヤマレンゲを食べてしまったからだといわれています．キリクチの数も減っているといわれています．シラビソもシカによって若い木が食べられたりして縞枯れが断絶していますし，シラビソ林の存続も危ぶまれます．

弥山の森は天川の人々の誇りであるとともに，かけがえのない存在です．同時に，弥山の森はみんなの財産です．大事な森だからこそ，国や県は国立公園や天然記念物を指定していますし，ユネスコは世界遺産やユネスコエコパークに登録しています．行政は保護区を設定したり，現場での対策を講じています．でもそれで完全というわけではありません．他のさまざまな解決策や協力体制があるはずです．わたしたちは何をすればいいのでしょうか？自然が守られるかどうかはそれを望む人々の意志によります．行政・市民・地元・研究者などの多様な主体が同じ意思を持って取り組むことで，さまざまな策が活きてくるのです．